

III 考 察

1. 遺跡の評価

調査では、古墳時代中期、古代後期、中世の遺構・遺物が検出された。なかでも平安時代の溝状遺構SD-1出土の遺物群は比較的一括性が高く、またある程度の年代の目安ともなりうる搬入土器と在地の土器とが共伴している点で松山平野の古代以降の土器編年にとっては重要な遺跡といえよう。次節では、これらの遺物を軸に管見にふれた松山平野出土の古代後期から中世の土器について、未報告資料の資料紹介もかねて検討してみたい。

2. 松山平野出土の古代後期から中世の土器

検討の方法としては、まず搬入土器との共伴により年代の基準となり得る資料をあげておき、次に型式学的な検討からこれらの間を埋めてゆくという方法をとるが、器種ごとの型式変化をたどれるだけの器種構成に恵まれた資料は皆無に等しく、土師器坏を中心にせざるを得ないことをことわっておく。

●石井幼稚園遺跡SD-1 (図22)

在地の土器としては、土師器坏・皿・鍋がある。坏・皿はすべて回転台成形によるもので、底部の切り離しはへらによっている。坏の形態は、大まかにみてA～D類の4とおりに分類できるが、その法量は口径12～14cm、器高3.5～5cmの値を示しており、概して円盤高台のC類が底部を突出させる分だけ器高が若干高くなる傾向があるが、全体的には法量に大きな差異はない。また、これらの坏はその器型を問わず、赤みを帯びた褐色に焼成されている点でも共通する特徴を有している。このような器型の差がどのようなことに起因するのかは不詳である。

このような在地の土師器と共伴して、若干の須恵器や搬入土器が出土している。搬入土器には東濃産灰釉皿85、緑釉皿・段皿82・83、京都洛西窯産緑釉耳皿84、畿内産黒色土器A類碗70などがある。このうち、黒色土器A類碗は坏型から碗型への変遷期の器型をなしており、ほぼ10世紀の前半期のものとみてよい。施釉陶器類には、この時期よりも若干遡るかと思われるものも含まれているが、SD-1全体の時期として考えた場合、この10世紀前半という時期におさめておくのが妥当であろう。

●筋違G遺跡SP-5 (図23)

松山市福音寺町所在。1989年の調査で、堀立柱建物を構成する柱穴のうちの1基より、瓦器碗と土師器碗の2点が出土している。土師器碗97は口径15cm、器高5.7cmで底部には断面三角形の低い高台が貼り付けられる。瓦器碗96は和泉型で、尾上編年Ⅱ-2期に属するものと考えられる。暦年代を森島康雄氏の修正意見に従えば12世紀の前半代ということになる。

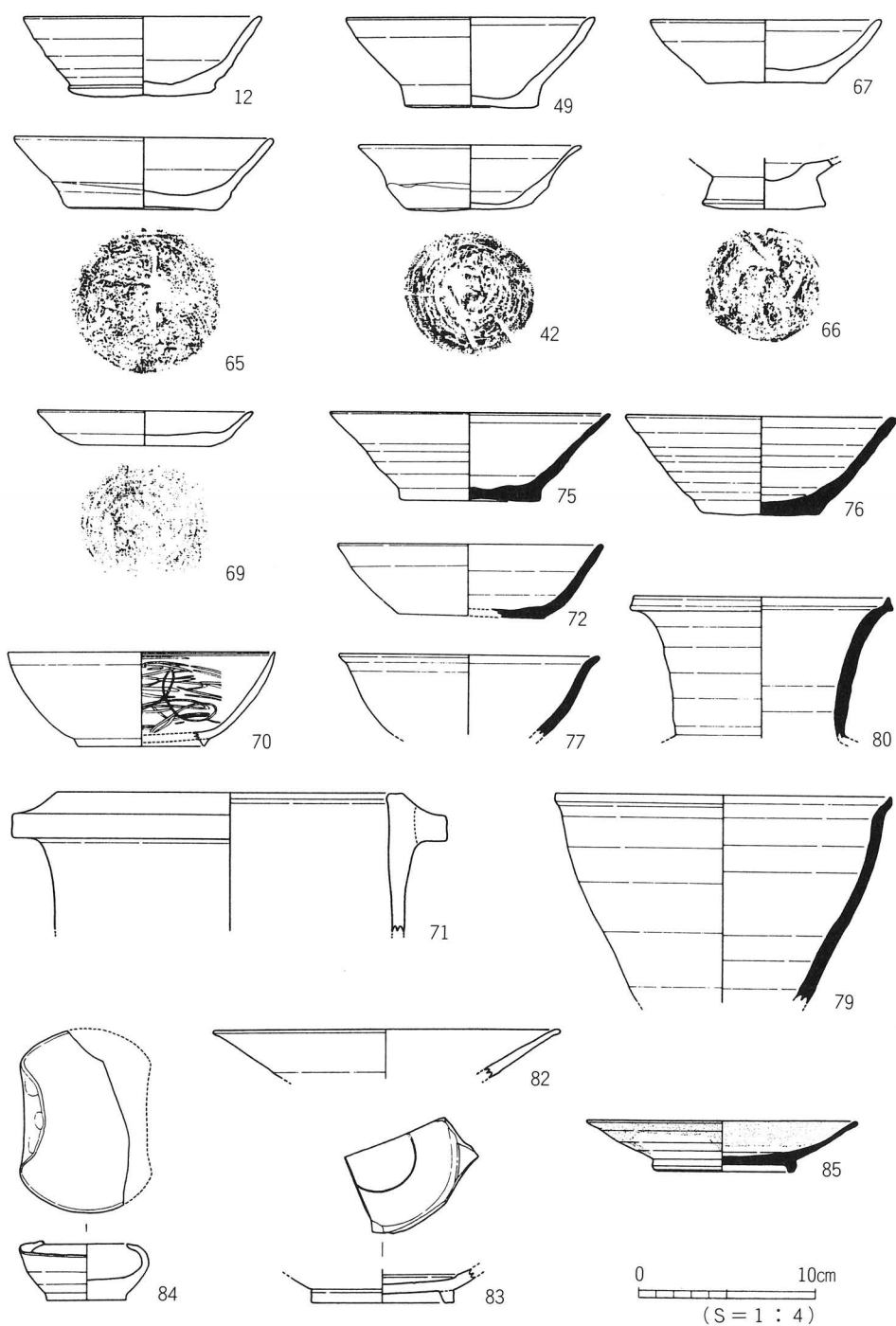


图22 石井幼稚園遺跡 S D - I 出土遺物

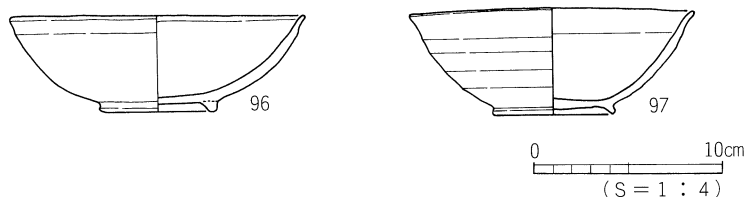


図23 筋違G遺跡S P-5出土遺物

●古照遺跡7次調査B区SK-9 (図24)

松山市南江戸に所在する。1971年の1次調査で古墳時代前期の灌漑用井堰遺構が調査されて以来、断続的に調査が行われているが、1990年の6次調査以降は継続して調査が実施され、1994年現在10次までの調査が完了している。1991年の7次調査B区土壌SK-9より、良好な一括遺物の出土をみている。出土したものは瓦器碗、土師器坏・皿で、瓦器碗105は和泉型13世紀初頭に比定できるものである。土師器坏98~100は底部回転糸切りによる回転台成形、口径12.8cm~13.6cm、器高3.5cm前後を測る。皿には口径8.5cm、器高1.2cm程度の小型で、底部糸切り回転台成形のもの103・104と、手捏ねによる成形で口径13cm、器高2.8cm程度の101・102のようなものとの2種類がある。回転台成形の坏・皿の底部には板目状圧痕がみられる。

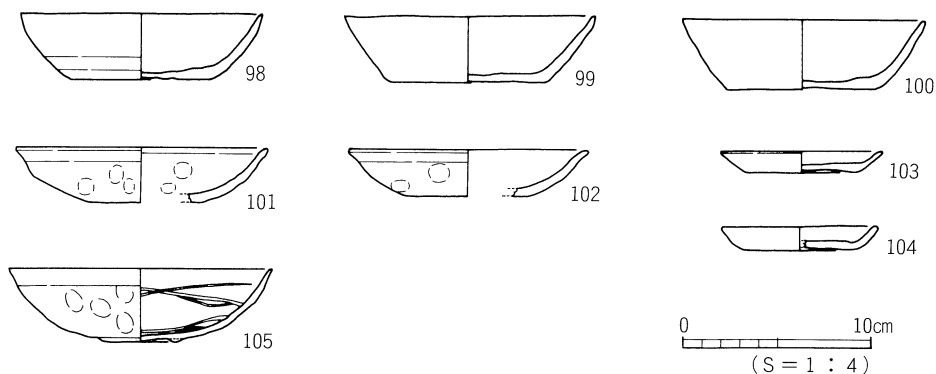


図24 古照遺跡7次調査B区SK-9出土遺物

●古照遺跡8次調査SK-1 (図25)

1992年~1993年にかけて行われた調査で、土壌墓から13世紀前半代の和泉型瓦器碗、湖州六花鏡とともに在地土器として貼り付け高台を持つ土師器碗が出土している。

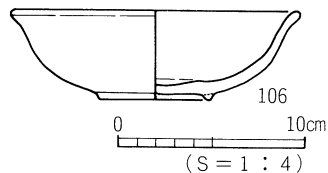


図25 古照遺跡8次調査SK-1出土遺物

●石井幼稚園遺跡 S K - 2 (図26)

魚住窯産の須恵器甕93、和泉型瓦器碗90と在地の瓦器碗91・土師器碗92とが共伴して出土している。このうち須恵器甕は、その口端部を上下方に僅かに摘み出す12世紀後半期の特徴を有するが、瓦器碗はこれより若干下って13世紀前半代のものであり、遺構の時期としてはこの瓦器碗の時期をとる。在地の瓦器・土師器碗ともに回転糸切りによって切り離された底部に輪高台を貼りつけている。土師器碗の内面は横方向に磨かれるが、瓦器に磨きはみられない。二次的な火熱により酸化されたか、或いは焼成の際の炭素吸着が充分に行われなかったため、土師器に近い焼成となっている。

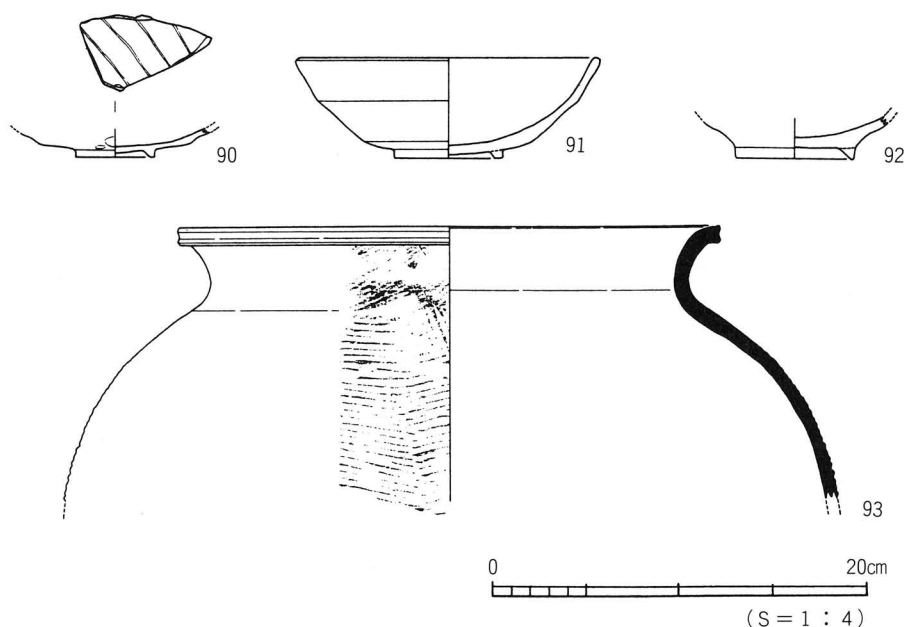


図26 石井幼稚園遺跡 S K - 2 出土遺物

●南江戸^{くじゆめ}瀬目遺跡土器集積遺構 (図27)

古照遺跡の北方150 mにあり、1992年の調査によって3基の土器集積遺構が検出されており、そのいずれもから多量の土師器を出土している。底部回転糸切りによる多量の土師器坏と共伴して吉備系土師器碗114が出土した。この搬入土器から13世紀後半の遺構と考えられる。

●久米窪田古屋敷遺跡 A 区 S D - 3 (図28)

松山市久米窪田町に所在する。調査は1987年に行われ、弥生時代の土壌・溝や奈良時代の掘立柱建物のほかに、中世の溝が検出されている。底部糸切りの土師器坏とともに東播系の片口鉢119が出土した。この片口鉢は魚住窯の製品、このてのものとしては最終段階のもので14世紀の中頃のものと考えられる。

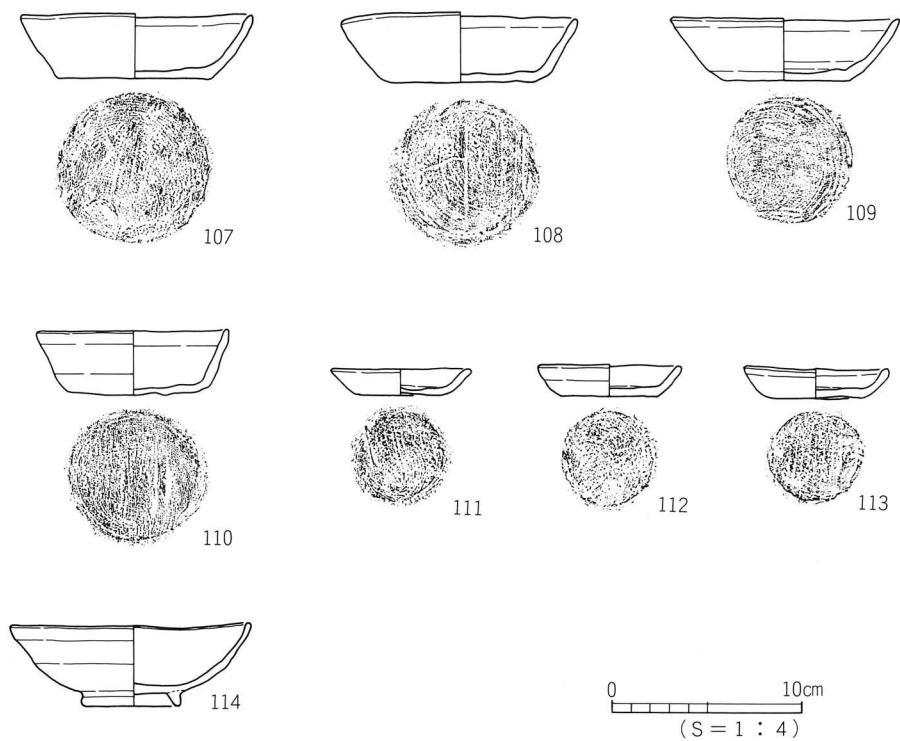


図27 南江戸關目遺跡土器集積遺構出土遺物

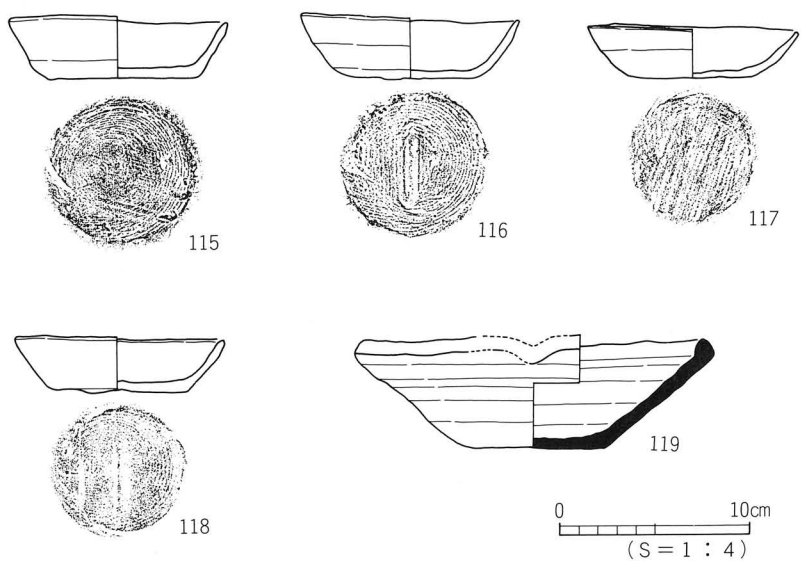


図28 久米窪田古屋敷遺跡A区SD-3出土遺物

以上が、搬入遺物により一応の年代を推定できる資料である。これらの資料の間を埋める、或いは補完するものとして、以下の資料を挙げておく。

●久米小学校構内遺跡 2 次調査（図29）

1983年、久米小学校校舎改築に伴う調査で、旧運動場の南端部と構内の西端部にあたる駐車場の 2 箇所の調査が行われた。駐車場では小溝、小柱穴が検出されたが、図示した 2 点の土師器は直径20cm程度の浅い堀込みの中で、蓋と身のように重なった状態で出土したものである。両者ともに石井幼稚園遺跡 S D - 1 の土師器坏と同様の製作技法によっており、その法量はひとまわり大きい。120は底部立ち上がりの部分に回転ヘラ削りを施し、体部の下半に稜を持つ B 類と同様の器型、121は高台を除けば体部外面に成形時の横撫で痕を残す A 類坏の器型になる。成形や各部の調整は、石井幼稚園例に比べると丁寧でシャープさを持っており、サイズもひとまわり大きいことから、10世紀前半の石井幼稚園例よりも遡る可能性がある。

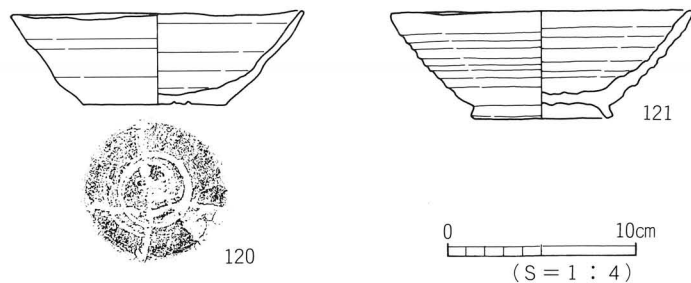


図29 久米小学校構内遺跡 2 次調査出土遺物

●久米窪田森元遺跡 S D - 4（図30）

松山市久米窪田町所在、前述の古屋敷遺跡の西方200mの位置にあたる。1987年の調査で、縄文時代後期の土壇や古代の溝状遺構が検出された。この溝状遺構 S D - 4 の出土遺物には、あきらかに古墳時代まで遡る何点かの遺物が混入しているが、概ね良好な一括遺物として扱えるものである。遺物は回転台成形の土師器坏がその主たるもので、若干の須恵器を含んでいる。底部ヘラ切りによる土師器坏は、その製作技法、器型のバリエーションともに石井幼稚園遺跡 S D - 1 のものに酷似しているが、122・123のように口径12cm前後とひとまわり小さくなるものも存在する。遺構としては、石井幼稚園 S D - 1 に続く時期10世紀後半頃を想定しておくが、122・123以外の遺物が単独で出土した場合には判別がつかない。

●鷹ノ子遺跡 1 次調査 S K - 3（図31）

1989年の調査で古代・中世の遺構・遺物が検出されている。これらの遺構のうち、180×70～80cmの長方形プランをなす S K - 3 は木棺墓と考えられ、この墳底から土師器坏・甕、八稜鏡、釘などを出土している。土師器坏133は底部ヘラ切りで、その口径は10.6cmと上述の森元遺跡の 2 点よりもさらに小さくなっており、法量の縮小化傾向を古から新への目安とす

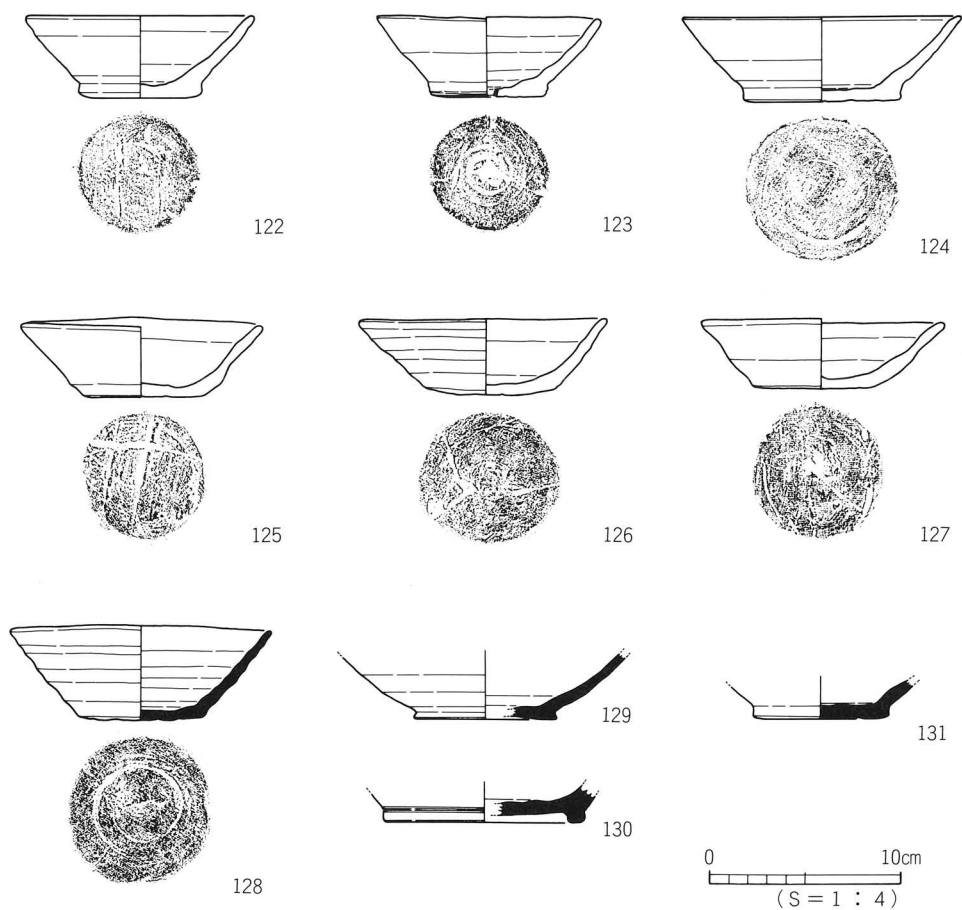


図30 久米窪田森元遺跡 S D-4 出土遺物

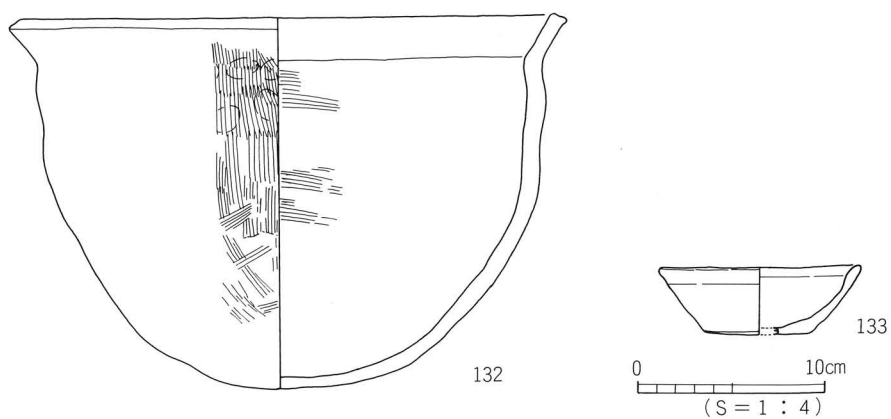


図31 鷹ノ子遺跡 I 次調査 S K-3 出土遺物

るならば、10世紀後半を想定した森元遺跡よりもさらに新しい時期を考えなければならない。

●石井幼稚園遺跡 S K - 1 (図32)

底部回転糸切りの回転台土師器坏89は、その器型・法量ともに S D - 1 出土の坏 A 類もしくは D 類に近似している。おそらく、当平野における糸切り底を持つ坏の初現に近い時期のものと考えられる。

●拓南中学校構内遺跡 S K - 2 (図33)

松山市枝松 5 丁目所在の松山市立拓南中学校構内における校舎建設に伴う調査が1984年に実施され、土墳墓と

みられる長方形竪穴から回転台土師器坏がまとまって出土した。底部回転糸切り、口径12cm 前後を計る。底部からの立ち上がり部分の角をとるように横撫でされている。法量的には13世紀後半に位置づけた南江戸廻目遺跡土器集積遺構と14世紀中頃 of 古屋敷遺跡 A 区 S D - 3 の同種の坏の中間にあり、この二者の間を埋める時期、14世紀前半頃のものと考えられる。

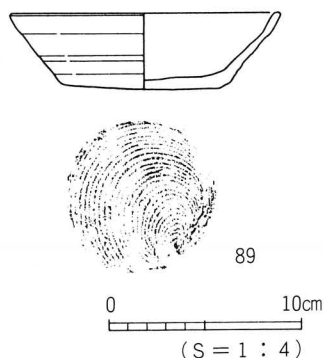


図32 石井幼稚園遺跡 S K - 1 出土遺物

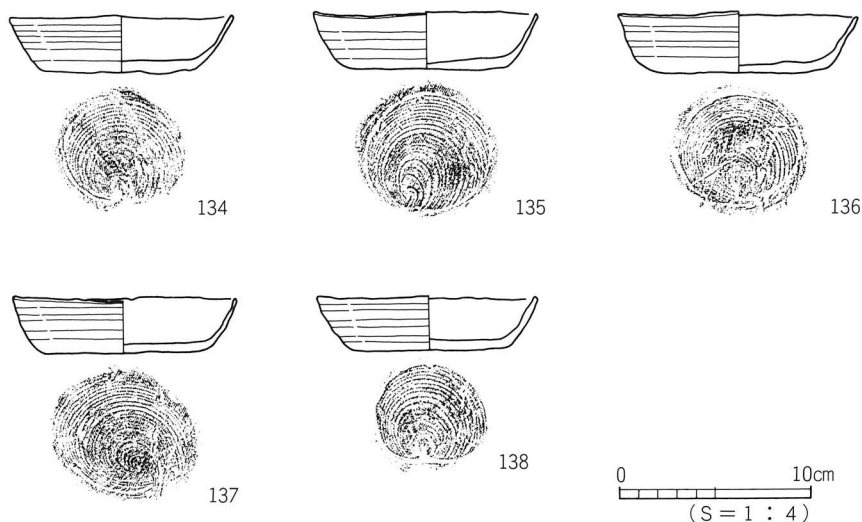


図33 拓南中学校構内遺跡 S K - 2 出土遺物

以上の資料について簡単にまとめておくと、まず軸となる10世紀前半の石井幼稚園遺跡 S D - 1 に先行して9世紀後半代に遡る可能性があるものとして久米小学校構内遺跡 2 次調査の 2 点の坏 (図29-120・121) があり、続く10世紀後半の資料としては久米窪田森元遺跡 S D - 4 の坏 2 点 (図30-122・123) がある。鷹ノ子町遺跡 1 次調査 S K - 3 の遺物 (図31) については、久米窪田森元をさらに下ると考えられるもので、11世紀前半頃のものとしてお

く。これら4遺跡出土の回転台土師器杯の切り離し技法はすべてヘラ切りによるものである。

石井幼稚園遺跡SK-1出土の杯(図32-89)は、切り離し技法を除けばその形態・法量、多段撫で技法とともに同遺跡SD-1の杯に近似しており、糸切り底を持つ杯の初現として考えた。ところで、石井幼稚園SD-1例以降、11世紀前半の鷹ノ子町遺跡SK-3の底部ヘラ切り杯まで法量の縮小化を根拠として相対的な前後を求めているが、こういった一元的な解釈だけで考えると、器型の小さくなったものに糸切り底が採用されなければならない、この杯が宙に浮いたものになってしまう。瀬戸内の古代末、中世の土器をまとめた橋本久和氏は、ヘラ切りから糸切りへの移行がある時期以降全面的に行われるのではなく、両者の手法が混在する時期があることを指摘している。10世紀後半とした久米窪田森元遺跡SD-4出土のこの種の杯は、法量の小さいものを若干含んではいるが、依然形態・法量ともに石井幼稚園SD-1のものと区別がつかねるものが多い。石井SD-1・森元SD-4の杯底部がすべてヘラ切りによっていることからこの時期までは上げ難いが、11世紀前半とした鷹ノ子SK-3のヘラ切り底を有する杯が僅かに1点のみの資料であり、必ずしも良好な資料とはいえないことを考えると、この石井幼稚園SK-1例を11世紀を前後する時期においてもさほど無理はないものとする。当平野における古代末から中世の土器を論じた中野良一氏は、松環古照遺跡において11世紀代の黒色土師器碗に伴う土師器杯がヘラ切りであるところから、在地の土師器杯・皿・碗類の底部切り離し技法のヘラ切りから糸切りへの転換期を11世紀後半から12世紀初頭の間に求めている。大きな画期としてのこの年代は動くまいが、さきの橋本氏の指摘にあるような切り離し技法の混在といった瀬戸内各地の現象にならう傾向が当平野では11世紀代を通じてあったものと考えたい。いずれにしても11~12世紀代の良好な共伴遺物を伴った回転台土師器杯の資料が手薄なことは否めず、資料の蓄積を待たなければ、切り離し技法転換の実態を明らかにすることは難しい。

上述のように11~12世紀代の回転台土師器杯の良好な出土例はほとんどないが、黒色土器・瓦器と土師器碗の共伴例は幾例かあって、既に報告されたり、資料紹介されているものもいくつかある。ここでは未報告の12世紀前半の筋違G遺跡SP-5の遺物を挙げておいた(図23)。

13世紀以降の瓦器や須恵器に伴う回転台土師器杯・皿の底部切り離し技法はすべて回転糸切りである。13世紀初頭の古照7次、13世紀前半の古照8次、石井幼稚園SK-2、13世紀後半の南江戸岡目、14世紀前半の拓南中学校、14世紀中頃の久米窪田古屋敷と続く。道後平野における13~15世紀の資料を中心に中世土器を検討した宮本一夫氏は、これらの杯・皿類が、時間的経過によって口径を減じ、また体部の立ち上がりが急角度になるとしており、ここでも概ねこれを追認する結果となった。

10世紀前半から14世紀までの回転台土師器杯を中心に資料を紹介した。11~12世紀代の資料が貧弱で、充実したものとはいえず、特に底部切り離し技法の転換期の実態については課

題が残っている。近年、当地域においても古代・中世土器に関する資料の掘り起こしを含めた研究が着実に進められており、これらの資料がよりきめ細かな編年へのたたき台となれば幸いである。

資料を検討するにあたっては第Ⅰ章にご芳名を記した日本中世土器研究会を中心とした方々に貴重なご教示・助言を頂いた。あらためて感謝申し上げる次第である。

参考文献

- 上田 真 『南江戸廻り遺跡』 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- 梅木謙一・宮内慎一 「鷹ノ子遺跡 1 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- 岡田敏彦 『一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－松環古照遺跡－』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1993
- 尾上 実 「南河内の瓦器碗」『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』 1983
- 栗田正芳・河野史知 『古照遺跡－第7次調査－』 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993
- 栗田正芳・河野史知 「古照遺跡 8 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1994
- 中野良一 「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』 1988
- 橋本久和 「瀬戸内の中世土器」『中世土器研究序論』 1992
- 宮本一夫 「道後平野の中世土器編年－13～15世紀を中心に－」『鷹子・樽味遺跡の調査』 愛媛大学埋蔵文化財調査室 1989
- 森島康雄 「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ－大和型瓦器碗とその周辺』 1992